

生活場面での課題遂行を目標とした 著作権フリー教材『いろどり 生活の日本語』の開発

藤長かおる・伊藤由希子・湯本かほり・岩本雅子・羽吹幸・磯村一弘

〔キーワード〕 生活者、特定技能、JF 日本語教育スタンダード、JF 生活日本語 Can-do、
レアリア

〔要 旨〕

『いろどり 生活の日本語』は、主に就労目的で来日し日本で生活する人を対象とし、基礎的な日本語のコミュニケーション力を身につけるための教材として開発された。生活ですぐに役立つ日本語を身につけるために、①「JF 生活日本語 Can-do」を参照して生活場面に必要な課題遂行226項目を目標とし、②会話理解では日常生活で遭遇する可能性の高い口語表現を取り入れ、読解素材ではレアリアを活用する等、日本で生活する人にとっての真正性を重視した。③文法や語彙など言語知識の学習では、理解できればいい日本語と使える日本語を区別して考え、④自律学習をサポートするために「文法ノート」「漢字のことば」「日本の生活 TIPS」を設けた。また、『いろどり』は著作権フリーの教材としてウェブサイトで公開することにより、各国教師による副教材の作成・共有が進み、日本国内・国外を問わず、教師同士の連携を促進する教材となっている。

1. はじめに

『いろどり 生活の日本語』（以下、『いろどり』）は、国際交流基金日本語国際センターが開発し、ウェブサイト（以下、「いろどりサイト」、国際交流基金日本語国際センター 2020）上で公開しているコースブック型の日本語教材である。「生活の日本語」というサブタイトルが示すように、主に就労目的で来日し日本で生活する人を対象とし、「日本で生活や仕事をする際に必要となる、基礎的な日本語のコミュニケーション力を身につけるための教材」^①として開発された。「入門」「初級1」「初級2」の3部構成で、「JF 日本語教育スタンダード」（以下、JFS、国際交流基金 2017）および Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment（以下、CEFR、Council of Europe 2001）の A1～A2 レベルに相当する。

「相互理解のための日本語」を理念とし、実際の場面で日本語を使って何がどのようにできるかという「課題遂行能力」と、他者の文化を理解し尊重する「異文化理解能力」を重視する JFS の考え方にに基づき、実社会で行う具体的な言語活動を例示した「活動 Can-do」（以下、Can-do）を学習目標として設計されている。課題遂行を目標としているという点では、同じく

JFS 準拠教材の『まるごと 日本のことばと文化』(以下、『まるごと』)と共通しているが、日本語や日本文化への興味・関心から日本語を学んでみたいという、より広い学習者が対象の『まるごと』とは異なり、『いろどり』は日本の生活場面での課題遂行を目標としているのが特徴である。本稿では、『いろどり』の開発過程を振り返ることによって、「生活のための日本語」という目標をどのように教材化していったかについて記述する⁽²⁾。また、『いろどり』公開後の反響やパイロットコースについて取り上げることで、本教材が与えた影響を述べることにする。

2. 開発の経緯

2018年12月に「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」が成立し、新たな在留資格「特定技能」が創設され、2019年4月から施行されることとなった。このうち、「特定技能1号」で在留するには、「相当程度の知識又は経験を必要とする技能」と、「ある程度日常会話ができ、生活に支障がない程度の能力を有することを基本としつつ、特定産業分野ごとに業務上必要な日本語能力水準」を身につけていることが求められている⁽³⁾。また、「特定技能1号」での在留資格を取得するには、希望する特定産業分野の「技能試験」と「日本語試験」を受験し、求められる基準を満たしているかを証明する必要がある⁽⁴⁾。

このような外国人材の受け入れ状況に対応するため、国際交流基金では、「特定技能」等の資格で来日する外国人が「生活場面で求められる基礎的な日本語コミュニケーション力」を「JF 生活日本語 Can-do」(以下、「生活日本語 Can-do」)として例示するとともに、就労目的で来日を目指す外国人材を対象とした新たな日本語試験として「国際交流基金日本語基礎テスト」(Japan Foundation Test for Basic Japanese、以下、JFT-Basic)を開発することになった⁽⁵⁾。さらに、「生活日本語 Can-do」で例示された基礎的な日本語を身につけ、JFT-Basic の受験準備にも役立つ教材を開発する必要から、2019年4月から新たな教材開発に着手することになった。

3. 基本設計

3.1 対象学習者の設定

当初の想定は「特定技能1号」資格取得のために来日前に日本語を学習する層であった。しかし、日本国内においても「特定技能1号」に係らず、生活のための日本語を必要とする学習者層が存在することから、国内の学習者も視野に入れることとした。学習形態は教室での対面学習を基本とするが、海外の人材送り出し機関等でのインテンシブな日本語コースにも、日本国内の地域のボランティア講座等での週1～2回の学習にも対応でき、さらにはプライベートレッスンや独習タイプの学習者も視野に入れ、柔軟性のある教材を作成することを目指した。

3.2 教材の概要

3.2.1 提供媒体

教材は印刷物として出版せず、「いろいろサイト」上でPDFファイル形式で無料提供する。付属する音声や周辺教材も同様である。印刷使用だけでなく、スマートフォン・タブレットでの閲覧も可能にするためである。また、素材の権利処理を行い、教育・学習目的であれば教材の複製・二次利用を認め、多言語化や副教材の作成・共有が自由にできる環境を整えた⁽⁶⁾。

3.2.2 構成・内容

既存の『まるごと』『入門』『初級1』『初級2』（Aレベル）のリソースが有効利用できるように、同様の3部構成とした。扱うトピックや言語知識を『まるごと』（Aレベル）と緩やかに関連させ、相互利用できる可能性を持たせた。『いろいろ』の全体構成を表1に記す。

表1 『いろいろ』の構成

部(レベル)	トピック (課)	教材本体		別冊	ワークシート
		活動	言語知識と文化	付属資料	『まるごと』りかい編の使用を前提
入門(A1)	9トピック (18課)	「話す」「聞く」 「読む」「書く」 の4種類 ※音声と聴解スクリプトを含む	漢字のことば 文法ノート 日本の生活 TIPS	解答 ことばリスト 文型リスト 漢字リスト他	文字、語彙、文型・ 文法等の練習問題
初級1(A2)	同上	同上	同上	同上	同上
初級2(A2)	同上	同上	同上	同上	同上
想定学習時間 (1課あたり)		「活動」150分～180分			「復習・練習」 60～120分

到達目標レベルは、「ある程度日常会話ができ、生活に支障がない程度の能力」の目安となるJFS/CEFRのA2レベルである。教材本体は、日本の生活場面での課題遂行を目標とする4技能別の「活動」(JFS「コミュニケーション言語活動」に相当)から構成される⁽⁷⁾。「活動」の達成を支える言語知識(JFS「コミュニケーション言語能力」に相当)補強のために「漢字のことば」「文法ノート」を、異文化理解能力を支えるために「日本の生活 TIPS」を各課に設けた。「文法ノート」は、広範な利用者を想定した場合ニーズが高いためである。「解答」「ことばリスト」等の付属資料は使いやすさを考え別冊とした。「復習・練習」部分は、『まるごと』の「りかい」編をはじめ市販教材の利用を前提とし、「ワークシート」(仮称)の作成については、教材本体完成後に検討することとした⁽⁸⁾。1課あたりの学習時間は「活動」と「復習・練習」部分を合わせて4～5時間程度とし、1部80～100時間、全3部で240～300時間程度である⁽⁹⁾。

3.3 開発手順

開発手順は図1のとおりである。シリーズ教材としての一貫性を保証するため、初年度は、まず、教材の基礎となる「シラバス作成」(①②)、教材の設計図に当たる「構成案作成」(③a)の順に進め、教材の全体像が明らかになった後、「初級」の執筆(④a)に着手した。「入門」よりも「初級」の開発を優先したのは、教材全体の到達レベルを先に示すためである。なお、翌年度、「入門」の執筆(④b)を開始する際、その前に「構成案再検討」(③b)の段階を入れ、シリーズ全体の整合性に配慮した。

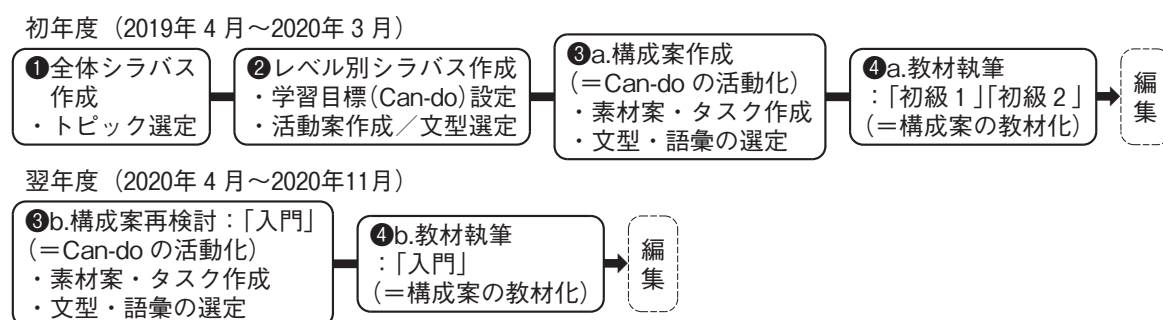


図1 開発手順

4. シラバスデザイン

4.1 学習目標 (Can-do) の設定

シラバス開発の出発点は、教材で取り上げる課題遂行を明らかにすることである⁽¹⁰⁾。そのため、日本の生活場面でのコミュニケーションを例示した「生活日本語 Can-do」を参照資料とし、次の手順でトピックに整理し、『いろどり』各課の学習目標を設定した。

第1段階「全体シラバス作成」では、「生活日本語 Can-do」381個を、「入門」相当のA1

表2 『いろどり』と『まるごと』のトピック比較

トピック	「入門」		「初級1」		「初級2」	
	『まるごと』	『いろどり』	『まるごと』	『いろどり』	『まるごと』	『いろどり』
1	日本語	はじめての日本語	私と家族	今の私	新しい友だち	私の周りの人たち
2	私	私のこと	季節と天気	季節と天気	店で食べる	レストランで
3	食べ物	好きな食べ物	私の町	私の町	沖縄旅行	旅行に行こう
4	家	家と職場	出かける	いっしょに出かける	日本祭	地域のイベント
5	生活	毎日の生活	外国語と外国語文化	日本語学習	特別な日	年中行事とマナー
6	休みの日1	私の好きなこと	外で食べる	おいしい料理	ネットショッピング	上手な買い物
7	町	街を歩く	出張	仕事の連絡	歴史と文化の町	さまざまなサービス
8	買い物	店で	健康	健康な生活	生活とエコ	自然と環境
9	休みの日2	休みの日に	お祝い	交際	人生	私の人生

生活場面での課題遂行を目標とした著作権フリー教材『いろどり 生活の日本語』の開発

(158個)と「初級」相当のA2(223個)に大別した後、まず『まるごと』のトピックに合わせて仮分類した⁽¹¹⁾。そして、日本の生活場面中心の「生活日本語 Can-do」と一般的な『まるごと』のCan-doの違いを考慮し、日本で生活する人にとっての真正性、遭遇する可能性の高いものを考えて『いろどり』のトピックを定めた(表2)。例えば、「仕事の連絡」では職場場面、「地域のイベント」では周りの人との交流、「さまざまなサービス」では店や公共機関の利用、「自然と環境」ではエコや自然災害のように、日本の生活に必要な場面を幅広くカバーできるトピック構成とした。

第2段階「レベル別シラバス作成」では、トピックに仮分類された「生活日本語 Can-do」を課ごとに分けて参照しつつ、4技能別の活動案に具体化し、学習目標となるCan-do(以下、「いろどり Can-do」)を設定した⁽¹²⁾。

「具体化」とは、どんな場面で誰が何のために日本語でどんなコミュニケーションをするかを考えることである。最終的な「いろどり Can-do」の内訳は表3のとおりで、最終的に参照した

表3 『いろどり』の目標 Can-do

	話す	聞く	読む	書く	合計
入門	48 (72)*	7 (9)	18(19)	6 (7)	79(107)
初級1	40 (69)	12(18)	12(14)	5 (8)	69(109)
初級2	36 (67)	18(32)	19(20)	5 (6)	78(125)
合計	124(208)	37(59)	49(53)	16(21)	226(341)

* () の数字は参照した「生活日本語 Can-do」の数を示す。

「生活日本語 Can-do」は341個 (A1 レベル145、A2 レベル196) である⁽¹³⁾。

4.2 学習項目としてのコミュニケーション言語能力

JFSの考え方に基づき、課題遂行としての「コミュニケーション言語活動」を支える「コミュニケーション言語能力」が必要になる。『いろどり』は基礎段階の言語使用者 (A レベル) 対象であるため、日常会話に必要な文型・表現と文法、基本的な語彙、読み書きに必要な文字を学習項目とした。

4.2.1 文型・表現と文法

『いろどり』では「入門」において82項目、「初級1」において95項目、「初級2」において87項目の文型が取り上げられている。これらの項目には、「【人】と／【場所】でV-ます」のような文型を表すものや、「Nはちょっと…」 「N、貸してください」のように定型表現に近いもの、「ナ A-です／イ A-いです」 「自動詞・他動詞」のように文法的なもの等が含まれている。

項目の選定にあたっては、まず『まるごと』 「入門」 「初級1」 「初級2」 で扱われた文型を、A レベルにおいて必要となる文型の目安とし、「シラバス作成」時に、それらの文型ができるだけ網羅されるように、トピックや活動案と関連づけて配分していった。そして、各課の「構成案作成」、「教材執筆」の過程において、Can-do 達成のために必要となる文型を定めていった。この過程において、日常生活や仕事の場面でよく使用されていることや、Can-do 達成のため

に必要となる等の理由から、『まるごと』では扱われていない文型や、『まるごと』の「初中級」「中級1」「中級2」で扱われている文型も取り入れている。

文型は、アウトプットまで求めるものと、聞いたり読んだりしたときに理解できればいいものを分けて考えている。例えば、「入門」では動詞文の否定の言い方として「V-ません」だけでなく、実際の会話でよく使用される「V-ないです」も会話例に提出している。ただし、「入門」の段階では「V-ません」をアウトプットできるようになることを目指し、「～ない」は聞いて理解できるようになることを目指すため、ナイ形の活用規則は示していない。テ形についても「入門」では「そのドライバー、取って」のような言い方を提出するが、この段階では指示理解までを目標とし、テ形や動詞のグループ分けを学ぶのは「初級1」に入ってからである。

4.2.2 語彙

日常生活で必要となる基本的な語彙のうち、まず「構成案作成」時にそれぞれの Can-do で必要な語彙をある程度割り当て、具体的な活動および素材を作成する中で全体の調整を行った。

表4に、付属資料「ことばリスト」に掲載されている見出し語から重複を除外した語彙・表現の数を示す。参考語彙とは、店員が使う丁寧な表現で聞いたときに理解できればいいもの、会話練習での追加語彙で話すときの参考にするもの、読解素材に含まれているが Can-do の達成には直接必要がなく、読み飛ばしてもよいものである。このように、語彙においても、素材に含まれているものを同等に扱うのではなく、学習者が使えた方がいいものと、使えなくてもいいが主に理解に役に立つものに分けて考えている。

表4 「ことばリスト」語彙・表現数

	使用語彙		参考語彙	
	語彙	表現*	語彙	表現
入門	866	125	194	24
初級1	783	41	176	15
初級2	1149	25	329	70
合計	2798	191	699	109

*表現とは、「ここ、いいですか」「よろしくお願ひします」等、単語レベルではないもの。

4.2.3 漢字

『いろどり』では、「入門」の第1課から漢字仮名混じり、ルビ付き（「入門」第1課、第2課はローマ字併記）の表記を基本とし、漢字学習のシラバスは独立したものとして作成した。日常生活において必要な漢字を見てことば

の意味がわかること、スマートフォン等で漢字を入力できることを目標とし、「初級1」「初級2」の活動の執筆がほぼ終わった段階で、各課のトピックや活動内容と関わりが深く、日常生活で必要となる基本的な漢字を含む語彙（「漢字のことば」）を、「入門」では各課3～10個程度、「初級1」

表5 漢字数

	「漢字のことば」 見出し語数	新出 単漢字数	異なる「読み」で の再出漢字数*
入門	93	92	11
初級1	183	182	40
初級2	178	155	54
計	454	429	105

*漢字としては新出ではないが「読み」が新しい漢字。

生活場面での課題遂行を目標とした著作権フリー教材『いろいろ 生活の日本語』の開発

「初級2」では各課10個程度、レベルに合わせて選び、全体で429字の漢字を学習できるようバランス良く配置した。漢字数は表5のとおりである。

5. シラバスから活動デザインへ

5.1 各課の構成と学習の流れ

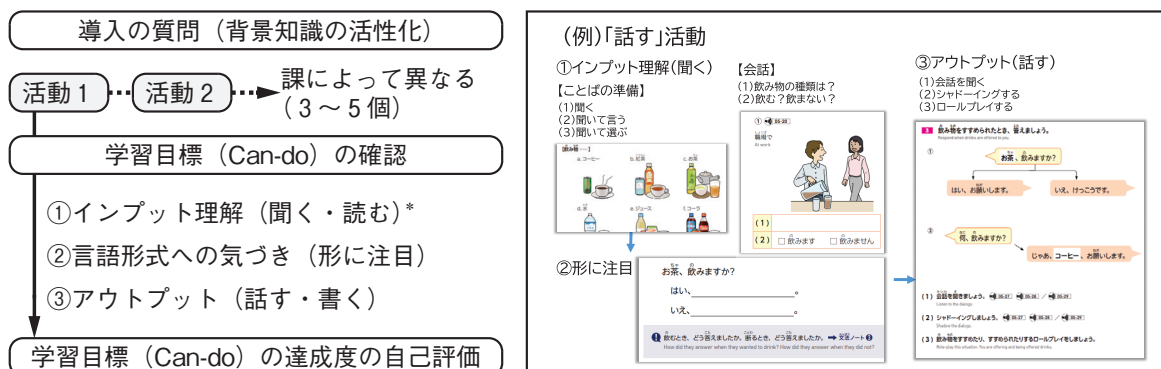
『いろいろ』の各課は複数の活動（課によって種類・配列が異なる）によって構成され（図2）、それを通じて表6の能力を身につけることを目標としている。

表6 活動別の目標*

話す	身近な場面で質問したり質問に答えたり、自分のことや身近なことについて簡単に説明したりできる。
聞く	日常会話の中で、相手の話から大切な内容を理解したり、簡単なニュースや公共のアナウンスなどを聞いて、必要な情報を聞き取ったりできる。
読む	日常生活の中でよく目にするお知らせや公共施設の掲示、飲食店のメニューなどから必要な情報を読み取ったり、外国人向けのやさしい日本語で書かれたパンフレット等を読んで、内容を理解したりできる。
書く	日常生活で必要なフォームに記入したり、友人などにメッセージを送ったり、身近なできごとについて簡単にSNSに書いて発信できる。

*表中の表記は「いろいろサイト」の「この教材の使い方」の説明に準じる。

活動の基本的な学習の流れは図2のとおりである。第二言語習得過程のモデルに基づき、インプットからアウトプットへのプロセスを段階化し、教材通り学習すれば学習目標が達成できるようになっている。基本的な考え方は『まるごと』同様（来嶋他 2012、藤長他 2018）、インプットの内容理解を優先し、その後、言語形式に注目させて意味や使い方への気づきを促し（＝「形に注目」）、文型や文法の理解へとつなげていく。文型や文法の練習も、Can-doの達成につながるように文脈化して行う。例えば、最終目標が「話す」の場合、「③アウトプット」では、「モデル会話の理解→シャドーイング→モデル会話を利用した練習（代入練習等）→ロールプレイや自分のことを言う練習」の順で、少しずつ自由度を高めていくことによって、無理なくCan-doが達成できるようになっている。



* 「聞く」「読む」活動の場合は①→②、「話す」「書く」活動の場合は、①→②→③となる。

図2 課の構成と学習の流れ

活動デザインでは、素材とタスクの真正性を重視した。インプット理解の会話例や読解素材では、日本に行ったときに遭遇する可能性のある日本語はなるべくそのままとし、過度の加工は避けた。タスクは、誰がどんな場面で何のために聞いたり話したり読んだり書いたりしているのか、実際のコミュニケーションを反映させた。詳細は 5.2 以降で述べる。

5.2 「話す」活動のデザイン

「話す」活動124個の内容を、「生活日本語 Can-do」の小カテゴリおよび CEFR Can-do (Council of Europe 2001) を参照して、やり取りのタイプを類別した結果を表7に示す。

表7 「話す」活動の種類

*数字は個数を示す

種類	入門(A1)	初級1・初級2(A2)	参照した主な CEFR Can-do
①日常生活での社交的なやり取り、雑談	26* 毎日の挨拶／簡単な自己紹介や毎日の生活／身近なことの感想	37 さまざまな場面での挨拶／休み等の連絡／自分の近況等／日本の生活に関する感想や今後の希望等／自国の季節や食べ物等の紹介	紹介や基本的な挨拶、いとまぎいの表現を使うことができる。【社交的なやり取り A1】挨拶、別れ、紹介、感謝などの社会的関係を確立することができる。【社交的なやり取り A2.2】興味のある話題の日常的なことなら短い会話に参加できる。【社交的なやり取り A2.2】
②店や公共機関のサービス、交通機関を利用する	9 簡単な買い物／飲食店での注文／交通機関の利用	11 買い物時の試着や商品情報の収集／食習慣や食べられない物／公共機関・サービスの利用／病院	人に物事を要求したり、与えることができる。【店や公共機関でのやり取り A1】旅行、宿泊、食事、買い物のような毎日の生活での普通の状況に対処することができる。【店や公共機関でのやり取り A2.2】
③日常生活に必要な情報を個人的に得る	5 人や物の場所／必要な物があるかどうか	12 日本語教室情報／旅行先の情報／機械の使い方／結婚式等のマナー／ごみの捨て方／災害時の対応	簡単な質問を聞いたり、答えたりすることができる。直接必要なこと、もしくはごく身近な話題についての簡単なことを、自分から言ったり、相手の言ったことに反応できる。【情報交換する A1】習慣や日常の仕事について質問をし、答えることができる。【情報交換する A2.2】
④勧誘、計画、相談、依頼等、相手に働きかける	4 簡単な誘い／都合をきく／物の貸し借り／待ち合わせの場所	16 誘い／計画等の相談／依頼／許可を求める／状況報告／トラブル(盗難や遺失物、体調不良)	簡単な表現を使って日常の課題に関するやり取りができ、物を要求したり、与えたり、簡単な情報を得たり、次にすることを話し合うことができる。【共同作業中のやり取り A2.1】
⑤戦略的なもの	4 確認／わからないことの表明／聞き返し／日本語でどう言うかきく	わからないことばの意味を尋ねる	理解できないと言うことができる。【説明を求める A2.1】分からないときは、繰り返してもらおうよう単純な表現で頼むことができる。【説明を求める A2.2】

最も多いのは、「日常生活での社交的なやり取り、雑談」(①)である。旅行者や短期滞在者の場合は、「店や公共機関のサービス、交通機関を利用する」(②)ことが重要だが、中長期的に日本で働きながら生活するには、毎日の挨拶に始まり、自分の近況や日々の出来事を話題にした雑談を通して、周りの人との関係を構築することが大切になろう。JFSの「相互理解」につながる部分でもある。わからないときに対処する戦略は CEFR では A2 レベルだが、『いろどり』では「入門」2課で「わかりません」「これ、日本語で何と言いますか？」等の

サバイバル的な表現をチャンクとして扱い、入門（A1）段階から使用できるようにしているのも特徴の一つである。

5.3 「聞く」活動のデザイン

全37個の「聞く」活動を、CEFR Can-do の「やり取り」「受容」に合わせて「やり取り型」と「大衆伝達型」に大別した後、CEFR Can-do を参照してテキストタイプおよび聞き方を整理した結果を表8に示す。

表8 「聞く」活動の種類

*数字は個数を示す

	種類	入門(A1)	初級1・初級2(A2)	参照した主な CEFR Can-do
やり取り型	①指示・アドバイス 【指示理解】	1* 職場での簡単な指示	3 避難訓練の指示／病気のと看に／日本料理の食べ方	当人に向かって、丁寧にゆっくりと話された指示なら理解できる。短い簡単な説明なら理解できる。【指示やアナウンスを聞く A1】 簡単な説明や指示を与えたり、理解したりすることができる。【情報交換する A2.2】
	②紹介・案内・説明 【要点理解】	5 家族紹介／間取りや職場の部屋の案内／職場の1日のスケジュール／道案内	8 道案内／仕事のやり方／休暇届けフォームの記入方法／薬の飲み方／職場のスタッフ紹介／地震発生時の行動について	
	③店や公共サービスの利用方法 【要点理解】	1 値段の理解	4 地域の日本語クラス等の情報／ジムや美術館等の利用方法／クリーニング・宅配便・ATM等の利用法／国際交流協会の外国人向けサービスについて	
	④個人的な対話 【情報把握】	0	7 住んでいる町の周辺情報／観光地／地域のお知らせ／年中行事	
大衆伝達型	⑤アナウンス 【特定情報把握】	0	4 駅構内や車内のアナウンス／地域の防災無線／イベント会場での注意や案内／ショッピングセンターで	短い、はっきりとした、簡単なメッセージやアナウンスの要点は聞き取れる。【指示やアナウンスを聞く A2】
	⑥ニュース 【要点理解】	0	3 天気予報／災害ニュース／病気の流行	
	⑦短い動画 【内容理解】	0	1 外国人向けの「日本の四季」紹介	

「聞く」活動は、「話す」活動でのインプット理解の「聞く」とは異なり、店や公共サービスの利用方法の「要点理解」(③)のようにアウトプットの必要のない課題遂行である。「これ、鈴木さんに持って行ってくれる?」(職場での指示)、「急げ!走るな!」(避難訓練)のような「指示理解」(①)、家族紹介や職場のスケジュールや仕事のやり方のようなまとまった説明の「要点理解」(②)、友人や知人からの暮らしに役立つ「情報把握」(④)等、いずれも日常生活に必要な課題遂行を活動化したものである。また、相手の発話のコントロールができない「大衆伝達型」では、イベント案内のアナウンスから日時とイベント内容だけを聞き取る等、わからない日本語の中から「特定情報把握」(⑤)する力や、映像等を手掛かりに未知語を推

測しながらの「要点理解」(⑥) する力が必要になる。そのため、アナウンスやニュースの聞き取り(⑤⑥) ではテキストを平易にするのではなく、テレビニュースの映像やアナウンスを聞いている場面をイラストで提示してストラテジー使用を促す等、実際の場面での聴解につながるよう配慮した。

5.4 「読む」活動のデザイン

全49個の「読む」活動を素材のタイプで大別した後、CEFR Can-do を参照して読み方を整理した結果を表9に示す。

表9 「読む」活動の種類 *数字は個数を示す

種類	入門(A1)	初級1・初級2(A2)	参照した主な CEFR Can-do
① 掲示・表示 【説明・指示理解】	7* ファストフード店のメニュー/店の看板/家電の操作ボタン/部屋の表示/備品リスト/駅の表示、ショッピングセンター内の表示/価格表示	8 カップ焼きそばの作り方/定食屋のメニュー/切符・電車内の表示/駅の掲示/地域のお知らせ/フリマアプリの表示/施設内の表示/不在通知/エコ活動の貼り紙	日常のよくある状況下で、簡単な掲示の中から身近な名前や語、基本的な表現が分かる。【必要な情報を探し出す A1】 日常の看板や掲示を理解することができる。例えば、公の場所では、道路、レストラン、鉄道の駅等の看板、職場では説明、指示、危険警告などの掲示が理解できる。【必要な情報を探し出す A2】
② 掲示・表示 【特定情報の把握】	6 職場のスケジュールボード/イベントの案内/店の掲示(営業日、営業時間)/フロアガイド/料金表	9 タウンマップ/講座案内/食品表示/薬の説明/病気のポスター/飲食店のクーポン/イベントのプログラム/商品の比較表/ごみの捨て方の説明	日常のよくある状況下で、簡単な掲示の中から身近な名前や語、基本的な表現が分かる。【必要な情報を探し出す A1】 広告、趣意書、メニュー、参考書目録、時刻表のような、簡単な日常の資料の中から予測可能な特定の情報を見つけることができる。【必要な情報を探し出す A2】
③ SNS、ネット上の記事・口コミ 【要点理解】	3 SNS(出来事、経験と感想)/SNSのプロフィール	9 SNS(天気、誕生日、イベントの感想)/ネット掲示板/お知らせのメール/グルメサイトの口コミ/旅行サイトの口コミ/イベントの報告記事/日本の習慣についての記事	簡単な情報文の内容や、簡潔な記述文の概要を把握することができる。特に視覚的な補助があれば、さらに容易に概要が把握できる。【情報や要点を読み取る A1】 手紙、パンフレット、新聞の短い事件記事のような、簡潔なテキストの中から特定の情報を取り出すことができる。【情報や要点を読み取る A2】
④ 案内・パンフレット・記事等 【全体的な内容理解】	0	4 国際交流協会のスタッフ紹介/コミュニティ誌のインタビュー記事/図書館の利用案内/防災パンフレット	よく使われる語で書かれた、国際的共通語彙もかなり多い、短い簡単なテキストが理解できる。【読むこと全般 A2.1】
⑤ メッセージ 【全体的な内容理解】	2 メッセージスタンプ/伝言メモ	1 待ち合わせに遅れるときのメッセージ	葉書の短い簡単なメッセージを理解することができる。【手紙やメールを読む A1】 短い個人の手紙は理解できる。【手紙やメールを読む A2.1】

日本の生活で出合う可能性のある素材として、一般の日本人が読むことを想定した「一般向け」、やさしい日本語で書かれた「外国人向け」、自分に宛てられたメモやメッセージ等の「個人宛て」の3つに大別できる。いずれも、素材はレアリアやそれに近いものを使用し、実際の

場面での読みを再現した真正性の高い活動になっている。駅や店の表示の意味を理解したり、カップ麺の作り方を見て手順を理解したりする「説明・指示理解」(①)では、素材の視覚情報のほか、どんな場面で読んでいるのかが理解の助けになる。例えば「電気を消すのを忘れずに」という貼り紙なら、部屋の電気スイッチの近くにあることがわかるように素材を提示し、現実の読み近づけた。イベントの案内から開催日時を探し出したり、食品表示を見て自分の食べられないものが入っていないか確認したりする「特定情報の把握」(②)では、自分が必要な情報だけが読み取ればよい。そのため、特定の情報を探し出す設問としている。「要点理解」(③)とは、ある程度まとまった文章を読むもので、特に記事や口コミは未知語や読めない漢字も多く、すべてを理解するのはAレベルの学習者には難しい。そのため、実際の場面で必要な情報を吟味し、読み取るべきポイントを明確にした設問になっている。

一方、生活場面には、やさしい日本語で書かれたものを読む機会もある。例えば、③の中でも日本に住む外国人が日本語で発信しているSNSであれば、比較的平易なテキストになる可能性がある。また、外国人向けにやさしい日本語で書かれた図書館の利用案内のような「案内・パンフレット・記事等」(④)や友人からの「メッセージ」(⑤)は、外国人が読むことを前提とした素材であり、全体を読み、Aレベルであってもある程度詳細まで理解することが可能であるため、設問もそのようになっている。

5.5 「書く」活動のデザイン

全16個の「書く」活動を、CEFR Can-doを参照して、何を書くかというテキストタイプに類別した結果を表10に示す。

表10 「書く」活動の種類

*数字は個数を示す

種類	入門(A1)	初級1・初級2(A2)	参照した主な CEFR Can-do
①申込書等のフォーム記入	2* パーティーの名札／イベントの申込書	1 問診票	ホテルの予約用紙などに、数、日付、自分の名前、国籍、住所、年、生年月日、入国日などを書くことができる。【申請書類や伝言を書く A1】 直接必要なことの用件についての短い、簡単なメモやメッセージを書くことができる。【申請書類や伝言を書く A2】
②SNS等での発信	2 SNS(朝食の紹介、休みの日にしたこと)	4 職場の自己紹介／SNS(自己紹介、旅行の感想、イベントの感想)	簡単な表現や文を単独に書くことができる。【書くこと全般 A1】 家族、生活環境、学歴、現在または最近の仕事について、簡単な句や文を連ねて書くことができる。【作文を書く A2.1】 出来事、過去の活動、個人的な経験の記述を短い文で書くことができる。【作文を書く A2.2】
③個人的なメール・メッセージのやり取り	2 誘いのメールへの返信／一緒に外出した人へのお礼のメッセージ	5 待ち合わせに遅れるときのメッセージ／お礼のメール／お祝い・送別のカード／新年のメッセージ／近況報告のメッセージ	短い簡単な葉書を書くことができる。【手紙やメールを書く A1】 感謝と謝罪を表現するごく簡単な個人的な手紙を書くことができる。【手紙やメールを書く A2】

書く活動は、決まった形式のある「申込書等のフォーム記入」(①)、自身のことや出来事、感想等を他者に向けて書く「SNS等での発信」(②)、遅刻の連絡やお礼、挨拶等の「個人的なメール・メッセージのやり取り」(③)に分類できる。いずれも単なる作文練習ではなく、実際の生活場面を反映させた活動であり、メッセージやメール、SNSはスマートフォン等で入力し、パーティーの名札、イベントの申込書、問診票、カード等は手書きで書くよう求めた。

6. コミュニケーション言語能力を育てるために

6.1 文法学習

『いろどり』における文法学習を支えるために「文法ノート」を設けた。『いろどり』では、文法に関する説明を教師が先にするのではなく、まず「形に注目」で注目した文型や表現の使い方について学習者自身が考えた後で、「文法ノート」を利用し、文法についてのルールを整理していくようになっている。例えば、「これ・それ・あれ」の場合、「話す」活動の買い物場面で対象物を指さしながら値段を聞く際に使用されているが、イラストをもとにどのような状況でそれぞれの指示詞が使われているか学習者自身が考えた後で、「文法ノート」で使い分けのルールを確認し、図表等で日本語の指示詞の体系を整理することができるようになっている。

『いろどり』は、文型積み上げ型の教材ではないが、このように「文法ノート」を活用することで初級の文法が全体を通して学習できるようになっている。説明の記述にあたっては、当該の文型や表現の「活動」の中での具体的な使い方から始まり、その言語形式が持つ文法的な意味・機能も記述することによって、限られた場面だけでなく、ほかの場面でも応用して使えるよう配慮した。また、当該の文型がほかの品詞にも接続する等の、活動の中では扱われていない使い方についての補足的な説明も加え、教師や学習者が学習項目を整理できるよう、活用表や、類似の表現・用法のまとめ等も加えた。

6.2 文字学習

文字学習のページとして、「入門」の第1課に「ひらがなのことば」、第2課に「カタカナのことば」、第3課以降に「漢字のことば」のページを設けた。実際の生活で目にする文字は活字や手書きなど多様であることから、複数のフォントで文字を示し、異なる字体に慣れるように配慮した。

各課で学習する漢字は、「無料」「お願いします」など漢字を含むことばの単位で提出・練習するようにしてあり、そのことばが含まれている文を読んで、漢字が読めるか、意味がわかるか確認し、キーボードやスマートフォン等で漢字変換できるか文を入力するよう指示している。

このように『いろどり』での文字学習は日常生活での必要最小限にとどめているが、学習者のニーズによっては、手書きで書く練習や、ほかの教材を使った漢字学習を組み合わせること

生活場面での課題遂行を目標とした著作権フリー教材『いろどり 生活の日本語』の開発

も想定している。

7. 「日本の生活 TIPS」における異文化理解

異文化理解については「日本の生活 TIPS」（以下、「生活 TIPS」）のコーナーを設け、各課で扱われているものの中から学習者が知っておくとい生活文化情報を、「入門」78、「初級1」55、「初級2」89の計222

表11 「日本の生活 TIPS」の種別

項目、大きく4つの種別について提供している（表11）。一般的な初級日本語教科書にも取り上げられる日本の地理や気候、

種別	入門	初級1	初級2	計
①日本についての背景知識や文化的情報	35	10	17	62
②日本の生活に役立つ情報	29	25	46	100
③日本で就労する上で知っておいた方がいい情報	2	1	2	5
④日本の生活を楽しむための情報	12	19	24	55
計	78	55	89	222

食べ物や年中行事、挨拶や冠婚葬祭の習慣といった文化的情報（①）よりも、スマホの充電、自転車ルール、外国人向けの公共サービスの利用法等、「日本の生活に役立つ情報」（②）が多い点が特徴である。また、日本の娯楽、観光地等「日本の生活を楽しむための情報」（④）を取り入れたのは、仕事だけでなく余暇活動も含めて生活範囲を広げることによって、日本の生活が「いろどり」豊かなものであってほしいと考えたからである。「日本で就労する上で知っておいた方がいい情報」（③）に関しては、業種や個々の職場によって就労条件が異なることが想定されるため、有給休暇や残業時間といった法律上の就業規程や、制服や朝礼といった一般的な日本の就労文化情報にとどめた。

「生活 TIPS」は学習者が英語等の媒介語で読むことを前提としており、日本語は母語話者教師向けの参考として掲載している。『まるごと』では、異文化理解は「生活と文化」ページにある質問を元に、日本の文化的事象について学習者が自国文化や自分自身のことと比較しながら理解を深める活動として設定されている（来嶋他 2012）が、「生活 TIPS」は活動の後に自分で読んでみたり活動と関連づけてクラスで読んでみたりするコラム的な要素が強い。これは、『いろどり』で学ぶ学習者にとっては、日本での生活や就労がより現実的であることから、具体的かつ詳細な生活文化情報を提供する必要があると考えたからである。また、来日経験のない非母語話者教師や日本を長く離れている母語話者教師にとっても、日本の最近の生活事情を知るための参考として利用されることも想定している。

8. 教材の反響

『いろどり』は、2020年3月に「初級1」と「初級2」、同年11月に「入門」が公開されたが、2020年4月1日から2021年7月31日までの累計アクセス数は3,191,484ページビューで、特定技能対象国に限らず北米・中南米や欧州など広い地域からアクセスされていることがわか

る (表12)。

『いろどり』は日本語と英語の併記であるが、国際交流基金の海外拠点では各国語版への翻訳を積極的に進めており、2021年8月現在、中国語（簡体字／繁体字）など8言語が公開済みで、今後も言語を追加予定である⁽¹⁴⁾。また、それぞれの国のニーズに合わせて授業の動画や教案を独自に公開する等、国・地域ごとに現場へのサポート体制も整いつつある。

著作権フリーの『いろどり』は二次利用が可能
なため、各現場に合った形式に編集・加工することや、自作教材をネット上でシェアすることも認められている。そのため、世界各地の教師が、授業用PPTやローマ字を付けた「入門」PDF等の自作教材をSNSや「みんなの教材サイト」⁽¹⁵⁾でシェアして相互利用ができるようにし、著作権フリーである点を活かし連携していることが窺われる。Twitter上では「あのボリュームがすべてオンラインにあって無料とは画期的」「日本の生活で実際によく使われる言い回しが多い」「本気で行動中心主義に基づいて構成されていると感じる」等のコメント⁽¹⁶⁾が投稿されており、課題遂行を目標にした教材設計が評価されていることがわかる。また、「#irodorijp」「#いろどり」のタグで、教材に関するコメントや実践例なども数多く寄せられている。

表12 国・地域別のアクセス数ランキング

1	日本	11	ミャンマー
2	アメリカ	12	香港
3	インドネシア	13	イギリス
4	フィリピン	14	メキシコ
5	中国	15	ドイツ
6	台湾	16	オーストラリア
7	タイ	17	カナダ
8	ベトナム	18	フランス
9	ブラジル	19	マレーシア
10	ネパール	20	インド

9. 教材の評価と今後の課題

『いろどり』の実践例は少ないため、ここでは、国際交流基金マニラ日本文化センター（以下、JFM）でのパイロットコースについて省察することによって、現時点での評価と課題を述べる⁽¹⁷⁾。当該コースは日本語学習歴のない者を対象とした「入門」のオンラインコースで、2021年5月～8月に実施された。学習時間は1日1.5時間、週4日で、「入門」全18課を、各課「活動」3時間（1.5時間×2回）、「復習」1.5時間の4.5時間で扱っている。「活動」の授業は『いろどり』の学習の流れをそのまま用いて行い、「話す」活動ではZoomのブレイクアウトルームを利用して学習者同士のインターアクションを促している。「復習」セッションでは、「活動」で扱った文型や表現、語彙、漢字の理解と定着を図るとともに、よりスムーズに話すことを目指し「活動」の会話練習も取り入れている。さらに、1課ごとに表現、文法、語彙、漢字を確認するための宿題をGoogle Formsで課すというコースデザインになっている。受講者13名中、自己都合で受講できなくなった2名を除き全員がコースを修了したことから、3.2.2で述べた「活動」と「復習・練習」の両方を取り入れ4～5時間程度という想定は妥当であっ

たと言えよう。

コース修了者からは「文法を説明するだけでなく文を聞いて推測を行う作業が入ることで理解促進が図れた」というコメントがあり、『いろどり』の文法学習についても肯定的に評価されている。また、「復習の授業をすることで、スムーズに言えるようになるので、とても役に立つ」というコメントは、「活動」で日本語を使うことによって学習者自身が認識した運用力の不足を、「活動」のあとで補うことの効果を述べている。授業を担当した講師からは「『いろどり』はそのまま教えればよいので使いやすい」という意見があり、5.1で述べた「無理なくCan-doが達成できる」教材としても評価されていると言えよう。ただし、文法中心の教え方に慣れている教師には、場面や文脈を意識させ、学生に気づかせる教え方を理解してもらう必要があること、また、滞日経験がなかったり少なかったりするフィリピン人講師にとって、日本の看板等、読解素材に含まれる文化的意味を理解し学習者に伝えるのが難しいことが、JFMでコースデザインに携わった講師から指摘された。今後、セミナー等の実施とともに、教え方の参考動画等を作成して「いろどりサイト」上で公開し、『いろどり』を使う教師の疑問に答えていくことが必要だろう。

『いろどり』は「生活の日本語」を必要とする人の多様なニーズに対応できることを目指して開発されたが、国内からの反響も大きく、オンラインでの利用も多くみられる。これは、日本で生活する人にとって必要な課題遂行を目標として設計された教材で、かつ、自由に加工・利用できるものがこれまでなかったからであろう。『いろどり』はこれで完成ではなく、「練習・復習」部分をサポートするリソース（ワークシート）の検討等も課題として残っている。そのためにも、日本国内・国外の多様な実践例を収集・分析して教育現場にとって必要なものを見極めること、すなわち、そのままでも利用でき、かつ素材としての柔軟性を持ったものを開発し提供することが大切だと考える。また、収集した実践例やその他の情報を「いろどりサイト」上に公開していくことで、世界各地の教師の対話に供することを、合わせて今後の課題としたい。

〔注〕

- ⁽¹⁾ 「いろどりサイト」の「いろどりととは？」より抜粋。
- ⁽²⁾ 『いろどり』の開発には、本稿の執筆者6名と執筆協力者である古川嘉子氏がかかわった。
- ⁽³⁾ 「特定技能の在留資格に係る制度の運用に関する基本方針について」（平成30年12月25日閣議決定）から引用。出入国在留管理庁「特定技能制度」より閲覧。
- ⁽⁴⁾ 「本邦での生活に必要な日本語能力及び従事しようとする業務に必要な日本語能力を有していることが試験その他の評価方法により証明されていること」（法第7条第1項第2号、上陸基準省令）と定められている。詳細については、外務省「新たな外国人材の受入れ 在留資格 特定技能」参照。
- ⁽⁵⁾ 「生活日本語 Can-do」は2019年8月30日にサイト上で公開。「JFT-Basic」は2019年4月に実施を開始、詳細は「JFT-Basic」のウェブサイトおよび熊野他（2021）参照。
- ⁽⁶⁾ 教材の著作権等、利用方法についての詳細は「いろどりサイト」のよくある質問「利用上のルール」を

参照。

- (7) 概ね『まるごと』『かつどう』編に相当。ただし、「書く」活動は『まるごと』では「りかい」編にある。
- (8) 企画時とは状況が変化しているため、「ワークシート」の作成は2021年8月現在、引き続き検討中。
- (9) 80～100時間は、4～5時間×18課＝72～90時間にオリエンテーションや評価にかかる時間を加えたもの。
- (10) CEFRの行動中心アプローチに基づく。日本語教材の開発例は藤長他(2018)参照。
- (11) 「生活日本語 Can-do」はトピック指標がないため、大カテゴリー「出かける」「暮らす」「働く」の3分類と「交通機関を利用する」「買い物をする」「公共機関を利用する」等の小カテゴリー13分類を参考に分類。
- (12) 「話す」は「生活日本語 Can-do」の「産出(話す)」と「やり取り(口頭)」、「聞く」は「受容(聞く)」と「やり取り(口頭)」、「読む」は「受容(読む)」、「書く」は「産出(書く)」と「やり取り(文書)」を参照して作成。
- (13) 「いろいろ Can-do」と「生活日本語 Can-do」は1対1の対応関係にはない。なお、複数の「生活日本語 Can-do」を参照したケースでは、主要なものに関連的なものに分けられる。
- (14) 8言語とは中国語(簡体字/繁体字)、モンゴル語、インドネシア語、クメール語、タイ語、ベトナム語、ミャンマー語、ネパール語で、韓国語、フィリピン語、スペイン語、ポルトガル語、ロシア語等が追加予定。
- (15) 「みんなの教材サイト」<<https://minnanokyozai.jp>>は2002年から国際交流基金日本語国際センターが運営しているユーザー登録制の素材提供型サイト。教材用素材をダウンロードできるだけでなく、自作教材やアイデアの共有もできる。
- (16) <https://twitter.com/france_nihongo/status/1245050159920226306?s=20>
<https://twitter.com/n_nihongo/status/1246168477834121219?s=20>
<<https://twitter.com/fumingoNL/status/1245011852662321152?s=20>>
(2022年1月27日参照)
- (17) JFMのパイロットコースについての情報は、JFMの武井康次郎氏・古川嘉子氏の提供協力による。

〔参考文献〕

- 外務省「新たな外国人材の受入れ 在留資格 特定技能」
<<https://www.mofa.go.jp/mofaj/ca/fna/ssw/jp/index.html>> (2021年8月31日)
- 来嶋洋美・柴原智代・八田直美(2012)「JF日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発」『国際交流基金日本語教育紀要』8、103-117
- 熊野七絵・戸田淑子・安達祥子(2021)「『国際交流基金日本語基礎テスト』の開発—生活場面でのコミュニケーションに必要な言語能力(A2レベル)を判定するCBT—」『国際交流基金日本語教育紀要』17、48-63
- 国際交流基金(2017)『JF日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック』
- 国際交流基金(2019a)「JFT-Basic 国際交流基金日本語基礎テスト」ウェブサイト
<<https://www.jpf.go.jp/jft-basic/>> (2021年8月31日)
- 国際交流基金(2019b)「JF生活日本語 Can-do」
<https://www.jpf.go.jp/j/urawa/j_rsrcs/seikatsu.html> (2021年8月31日)
- 国際交流基金日本語国際センター(2020)「いろいろ 生活の日本語」ウェブサイト
<<https://www.irodori.jpf.go.jp/>> (2021年8月31日)
- 出入国在留管理庁「特定技能制度」
<https://www.moj.go.jp/isa/policies/ssw/nyuukokukanri01_00127.html> (2021年8月31日)
- 藤長かおる・磯村一弘(2018)「課題遂行を出発点とした学習デザイナー『まるごと 日本のことばと文化』中級(B1)の開発をめぐって—」『国際交流基金日本語教育紀要』14、67-82
- Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press. 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』初版第2刷、(2008)吉島茂・大橋理枝(訳、編)、朝日出版社